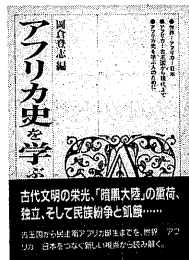


「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

岡倉登志編 アフリカ史を学ぶ人のために 世界思想社
1996年 x+296p.



アフリカの歴史を知ろうとして高校の世界史の教科書を開いて見ても、期待したようなことはあまり出ていなかったという経験をお持ちの方は多いのではないだろうか。その結果として、若い人がアフリカに興味を持つ機会を奪ってしまっていたり、欧米が世界の大半であるかのような価値観を持ってしまったり、新聞やニュースに書かれる情報だけでアフリカのことをわかったような気になってしまうというような憂うべき事態が進行しているかもしれない。もしそうなったとしても、誰もそんな事態には気づかない。

「日本におけるアフリカ研究・教育、とりわけ歴史研究・教育はあまりにも立ち遅れている」という認識からこの本は企画された。他の国々、地域のアフリカとの関わりに比べれば日本とアフリカの関わりはその歴史も浅い。しかし最近の報道を見ているだけでも「アフリカ」はよくでてくる。NGOの活動などを通して日本人のアフリカとの関わりも多くなってきている。その上、アフリカの人々から見ると「非ヨーロッパ世界にあって、あるいはまた有色人種に属しながら日本が驚異的に工業化した」として関心をもたれているという。

本書は大学教育のテキストとして使用されることを意識しており、「第一部 世界—アフリカ—日本」で世界史とアフリカ、アジア・太平洋とアフリカ、世界経済とアフリカを概説した上で、「第二部 アフリカ—古王国から現代まで—」でアフリカ通史を論じた。いわゆる「黒アフリカ史」の枠にこだわることなく北アフリカやイスラム圏との関わりも必要に応じて論じられている。第三部は本書の書名ともなっているが「アフリカ史を学ぶ人のために」と題して各章別に参考文献60点余りを執筆者の解題付きでリストアップしている。大学教育の場のみならず広く一般の人々にも手軽な読み物として読まれてほしい本である。(鈴木陽子)

福井聡著 アフリカの底流を読む 東京 筑摩書房(ちくま新書) 1996年 238p.



著者は毎日新聞社の記者である。1990年から95年にアフリカに駐在した経験を持ち、40を超える国々を訪れ取材を行ってきた。本書はその経験をもとにしている。

本書の目的は、アフリカの抱えるさまざまな問題点を提示するということであり、取り上げられた国は18カ国におよぶ。アフリカの多様性を語るに当たって、さまざまな国を取り上げるというのは、一つの有効な方法ともいえる。日本にとって遠い「国」である「アフリカ」が、さまざまな国家のひしめく大陸であるということを再認識させてくれる本である。

この本の醍醐味は、著者自身がその探求心をもって、アフリカの国々に飛び込み、人々の声を聞いてきたというところにある。著者自身が見てきたもの、感じたことを本書は生き生きと描写している。アフリカの人々、文化、社会を知りたいという気持ちが伝わってくる。

しかし、これだけ多くの国々を新書版の本で扱っているため、どうしても「広く浅く」なってしまった印象はぬぐえない。したがって、各国の事実関係に関しては一面的な記述になりがちである。些細な部分での事実誤認がいくつかあり、気になるところである。

また、アフリカの事情に疎い読者にはその背景の説明が必要なのは確かなのだが、その記述にかなり多くのページを費やしてしまい、本来のこの本の魅力を削いでしまっているのが残念である。

本書は、アフリカの多様性を伝えようとするあまり、時として一国の抱える複雑な事情を飛び越えて、一つの国から一つの絵を取り出そうという傾向がある。しかし、本書が、今アフリカの抱える問題とは何なのか、読者に対して問いかけを行なっていることは確かである。(児玉由佳)

田中二郎・掛谷誠・市川光雄・
太田至編 続 自然社会の人類学：変貌するアフリカ ア
カデミア出版会 1996年
441p.



本書は、1986年に出版された『自然社会の人類学—アフリカに生きる—』（アカデミア出版会）の続編にあたる。前書の出版と同年の86年に、本書の編者4人の属するアフリカ地域研究センターが京都大学に設立された。以後10年間にわたって同センターを中核として実施されてきたアフリカ研究の成果の一端を披露したのが、本書である。

収録された13編の論文では、砂漠、半砂漠、疎開林、熱帯雨林といったアフリカの四つの異なった植生帯で生活する狩猟採集民、牧畜民、焼畑農耕民の自然社会を対象として、詳細なフィールドワークに基づいた生態人類学的な考察が試みられている。この間の10年はアフリカにとって激動の時代であり、本書の対象としている自然社会もその潮流と無縁ではありえなかった。本書の6編の論文は自然社会のいわば伝統的な存在様式や規範のさらなる解明をめざしたものであり、残る7編の論文は自然社会の変容過程に焦点をあてて洞察したものである。

本書の諸論文から、自然社会の経済的変容について以下のような示唆を与えられた。アフリカ諸国の導入した構造調整政策によって、経済に対する国家統制は排除され民間部門の活性化が図られており、国家対民間という対立項で見た市場経済化が進行しつつある。このような市場経済化の影響を自然社会も被っているわけであるが、自然社会では自給的な生業経済下でこれまで商品とみなされなかった財が取引きの対象となり、自給対貨幣という対立項での市場経済化が同時に進行しつつある。もちろん、二重の市場経済化の具体的な発現形態は、自然社会それぞれで多様である。

例示した経済的変容だけでなく、自然社会とその変容過程について最先端の研究が発信した豊富な情報を、読者それぞれが解読していただきたい。

(池野 旬)

和田正平編著 アフリカ女性の
民族誌—伝統と近代のはざ
まで— 東京 明石書店
1996年 453p.



今日の世界的なジェンダー研究の盛り上がりの中で、日本のアフリカ研究では女性領域が大きく欠けているという認識から、国立民族学博物館に集う研究者が「アフリカ社会における性差の伝統的構造と近代化」のテーマで共同研究をもった。これは1991~93年の研究成果の一部で、アフリカ女性研究の第一歩にしようと公表されたもの。

エフェ・ビグミー、レンディーレ、イラク、ベンバ、カメルーン高地農民、バンバラ、カメルーンのバムン王国、レイ・プーパー、キプシギス、ボゾ、アシャンティなどのグループの人々のくらしのさまざまな側面を、女性という共通項でくくった11論文—そこに集団主義社会の男と女の関係の原点を見る気がする。

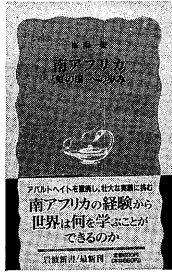
集団的社会ほど男と女の役割がはっきりしているようだ。そうした状況の中で、レイ王国の多婚制下の女たちに独自のフェミニズムを見る嶋田義仁氏の指摘は興味深い。彼女たちは単婚制下の女たちに比べて子供の数が少ないうえに彼らを長命に育てており、時に応じて母親の役割を共有もする。単なる「産む性」や生物学的母性をこえた“メイター”としての母性の概念は示唆に富んでいるのではないか。

また、息子の婚資をつくるために水牛を装い、自分を殺させるキプシギスの貧しい老女の話など、おもしろいエピソードにあふれている。はじめの11論文が伝統的集団の研究なのに対し、第12論文はセネガルのダカールに住む女性たちの生活調査、五つの事例研究とトンチンと呼ばれる互助制度が紹介される。最後は集団の慣習にノーといったエジプトの新しい女性ナワル・エル・サーダウィの思想とその女性研究である。

執筆者は関西に限らず、全国に散らばった大学教授陣で、扱う地域もアフリカ全土にまたがる意欲的な共同研究。今後の展開が期待される。

(丹埜靖子)

峯 陽一 南アフリカ「虹の国」への歩み 岩波新書
1996年 245p.



1994年4月の選挙によってマンデラ政権が誕生してから早くも3年近くが経とうとしている。選挙前後、南アフリカの動きをあれだけ報道した日本の新聞も、現在は稀にしか南アフリカの情報を伝えていない。本書はアパルトヘイト期の「負の遺産」を背負いながら民族和解を掲げて発足した新政権の「壮大な実験」の現状を描くとともに南アフリカに人種主義がいかにして形成されてきたかを明らかにした好著である。

全体は序と5章から成る。南ア史上初めて全人種が参加した制憲議会選挙の様相を伝える序に続いて、第1章「アパルトヘイトの崩壊」では第2次世界大戦後の政治史を国民党、アフリカ人抵抗運動の双方から追い、アパルトヘイト政策の矛盾が交渉・選挙へ導いた経緯を明らかにしている。そして選挙が成功裡に実施できた秘訣を連立政治と比例代表制に求めている。第2章「植民地支配と人種主義の起源」では複雑な人種関係と多様な地域性をもつ同国でいかに人種主義が形成されてきたかを明らかにしている。つづく第3章「都市化の百年」で著者は「アフリカ人の都市化の脅威に対するアフリカーナーの直接的反応」(133ページ)こそアパルトヘイト政策の原因であるという視点を提示している。この視点に立ち、第4章「同時代の南アフリカ社会」で「都市定住を求める人々に雇用機会と住宅を提供し、農民が農民として暮らしていける農村社会を築くこと」(142ページ)が新政権の最大の課題であるとす。そしてこの課題の解決のために新政権が打ち出した「復興開発計画(RDP)」を中心に第5章「新生南アフリカの挑戦」は国際関係も含めて南アフリカの今後の進むべき方向を展望している。

(林 晃史)

ネルソン・マンデラ著 東江一紀訳 ネルソン・マンデラ 自伝：自由への長い道 上・下巻 NHK出版 1996年 463+431p.



あのネルソン・マンデラ南アフリカ大統領の自伝が翻訳され

た。帯によると映画にもなるそうである。1994年の劇的な総選挙によってこの国に初めて民主主義が確立され、マンデラ政権が誕生したことは記憶に新しい。原本はその半年後に出版され南ア史上最大のベストセラーになったもので、英米でもたいへんな売上を記録した。おそらくアフリカ人が書いた本としては最も多く読まれた書物のひとつであろう。

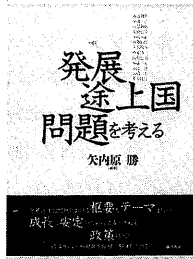
マンデラは、その人格的高貴と堂々とした体軀を以って反アパルトヘイト闘争の象徴的存在であり続けた。みずからの反逆罪裁判で展開したあざやかな弁論と、27年に及んだ獄中生活は、彼に対するある種の神格化すらもたらした。本書には、そういった酷烈な運命を生き抜いていく一個の精神史が記録されている。絶望に冒されず、自恃と理念を失わず、困難な状況と常に戦おうとする不屈には、良質の教養小説だけが持つ香気が感じられる。

さらに印象深いのは、マンデラに優るとも劣らない人物群が彼を導き、永い永い闘争史を持ち堪えていった有り様である。どこかでひとつ歯車が狂えば、南アフリカは殲滅的な人種間抗争に陥っていてもおかしくはなかった。残虐きわまる弾圧のなかにあっても民族融和の指針を守り通し、この国を破滅から救った群像が描かれていることで、本書は、南アフリカおよびアフリカ全体の政治史の善き教科書ともなっている。

その先人の多くは、貴い犠牲となって今は亡い。マンデラは、そういう人々を代表してノーベル平和賞を受けたという。「あれだけの崇高な人格を創りあげるには、あれだけの過酷な抑圧が必要だったのだろう」。その哀悼の想いには、よき指導者と友人によって正しく導かれたことへの感謝と、その資産を後続に伝えようとする強い意志が窺える。このドラマは現在も進行中である。

(平野克己)

矢内原勝編 発展途上国問題を考える 勁草書房 1996年 326p.



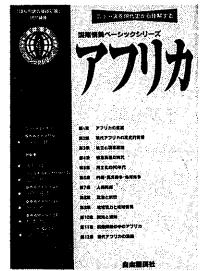
本書には、主に慶応義塾大学出身の開発経済学を専門とする研究者14名の論考が収められている。ただし、全体が特定の意図に基づいて構成されているわけではないので、開発経済学や援助に関する包括的テキストを期待するべきではなく、むしろ反対に、発展途上国をめぐる問題意識の有りようが専門家の間でさえいかに多様であって、いかに広範に放射されているかが読み取れる。中間商品と効用理論を扱った第2章、援助を国際公共財として把握しようとする第4章、内生経済成長理論の開発問題への適用を試みた第9章、情報の非対称性を前提としてアジアの金融発展を論じた第11章など、現代途上国研究の幅の広がりには目を瞠る。

各論文が対象としている地域はアジアとサブサハラ・アフリカである。その昔は「第三世界論」のなかで同列に論じられることも多かった両者が、久し振りに一冊の書物のなかで並んでいる気がする。最早同じ論理では語れなくなってしまったアジア経済とアフリカ経済の明暗が、読んでいて苦しくなるほどだ。第2章、第5～8章、第14章がアフリカについて論じている。矢内原、坂元、小浜論文はいずれも構造調整を論じたもので、政策論や政策実績のサーベイが中心となっているが、経済発展への経路は見い出されていない。気が滅入るようなアフリカ経済の現実が各執筆者の筆を重くしている。「構造調整は……つまずいたライオンを起こすことである。経済開発はそのあとの対象であろう」(p.144)という表現には、ある種の冷静な諦観を感じさせる。構造調整政策の成否は「それに対する国内そして外国民間企業の反応の違い」(p.166)によるという議論には全く賛成である。

第1章で日本のアジアに対する開発支援を論じて、「政策の総合性」という概念を指定した当研究所の平田章氏は、まことに無念ながら昨年他界された。この場を借り、慎んで御冥福をお祈りする。

(平野克己)

小田英郎ほか アフリカ 東京 自由国民社 1996年 383p.



日本の新聞やテレビのなかでアフリカは周辺的な地位しか与えられていない。大きな事件があれば伝えられるが、それも断片的な情報に限られ、背景について満足な説明がなされないまま、短時日のうちにほかの幾多のニュースに押し流されてしまう。そのような報道に飽きたらず、もう少しアフリカをよく知りたい、しかし何から入っていけばよいのかわからない、という人々が本書の読者となろう。『現代用語の基礎知識』の姉妹編である「国際情勢ベーシックシリーズ」の一環として編まれた本書は、現在のアフリカが抱える政治・経済・社会の諸問題と、それらがおかれている文脈について、専門知識をもたない読者向けにまとめたものである。

第I章でアフリカを地域として概観し、第II、III章で植民地化から独立に至るアフリカの歴史をたどったのち、第IV章以降が各論となっており、最終章の第VII章まで順に、構造調整、民主化、内戦・民族紛争・地域紛争、人種問題、政治と宗教、地域協力と地域機構、開発と援助、国際関係、現代アフリカの課題(食糧問題、人口問題、難民問題、人権問題、エイズ問題、環境問題)が扱われる。豊富に個別事例を引くと同時に、ほぼ各章にテーマ地図を付し、アフリカを視覚的に全体としてとらえることができるよう工夫されている。

入門書としての性格上やむをえないことであるが、多少のものたりなさは否めない。とくに最終章でまとめて扱われる六つのテーマは、それぞれ一章を当てて然るべき重要な問題ばかりである。しかし、それを補うものとして、簡単な解題つきの参考文献ガイドが巻末に付されており、アフリカにさらなる関心をもった読者には役に立つだろう。

(牧野久美子)